

令和 4 年 6 月 7 日現在

機関番号：32612

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K12721

研究課題名（和文）「知の理論（TOK）」に基づく学校図書館モデル構築の研究

研究課題名（英文）A study to construct a school library model on the basis of "Theory of Knowledge (TOK)"

研究代表者

根本 彰（NEMOTO, AKIRA）

慶應義塾大学・文学部（三田）・講師（非常勤）

研究者番号：90172759

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：国際バカロレア・ディプロマプログラム（IBDP）が日本の教育課程および、教育課程と学校図書館との関係にどのような示唆を与えるかについて基礎的な研究を行った。IBDPの思想的背景、そのカリキュラム構造、日本の学校図書館の教育行政上の位置付け、戦後教育における図書館教育の類似性の研究に取り組むことにより、IBDPが日本の学校教育に深い影響を与えること、そしてそれが学校図書館の振興につながることを明らかにした。また、IBDPと学校図書館の関係についての翻訳書を出版し公開シンポジウムを実施したことで、今後の発展的研究につながる基盤をつくることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

国際バカロレアで実施されている探究学習は歴史的に人文主義（humanitas）をベースにした欧米の学習カリキュラムの延長線上にあるものであり、学校図書館の支援無しに成り立たないものである。これにより、日本でも2020年代実施の学習指導要領に初めて明記された探究学習が、図書館および図書館員による支援無しでは成り立たないことを示した。今後、文部科学省をはじめとする教育行政当局や学校教育研究者、学校図書館関係者に対して、学校図書館を教育課程に組み込むための行政的施策の必要性の理論的根拠を与えることができた。

研究成果の概要（英文）：I advanced a basic research on how the International Baccalaureate Diploma Program (IBDP), which emphasizes learners' inquiry based learning and locates the support of school libraries and librarians, could give implications for Japanese national curriculum courses. By working on the educational theory background of the IBDP, its curriculum structure, historical reasons of poor financial conditions of school libraries, and the study of the similarities of library education (Toshokan Kyoiku) in postwar education reform, it was clarified that the IBDP has a profound impact on Japanese school education and that it would lead to the promotion of the school library. In addition, by publishing a translation of Anthony Tilke's International Baccalaureate Diploma Program and School Libraries and School Libraries: Inquiry-based Education and holding a public symposium, we were able to lay the firm foundation for future developmental research.

研究分野：図書館情報学

キーワード：国際バカロレア 学校図書館 探究学習 教育課程

1. 研究開始当初の背景

学校図書館法が1997年、2014年に改正されて、学校図書館の整備は進んでいるが教育課程との関係は曖昧にされたままである。一方、国際バカロレアの中心には探究学習(inquiry based learning)があり、探究学習を実施するには学校図書館の利用と図書館員の教育支援を重視している。2013年5月の教育再生実行会議第3次提言に、国際バカロレア導入校の大幅な増加(200校)を目指すことが記載され、同年に文部科学省と国際バカロレア機構(IBO)との合意により、「日本語と英語によるデュアルランゲージ・ディプロマ・プログラム」(日本語DP)が導入された。国際バカロレアは2010年代後半に本格的にとりいれられ始め、現在、学校教育法第一条で定義された学校(一条校)でIBプログラムを導入している日本の学校は50校ほどある。また、2021年から実施の新しい学習指導要領には高校の総合的探究の時間をはじめとして「探究」を大幅に取り入れることになっている。このように、探究学習についての動向の変化があり、そこで学校図書館の支援をどうすすめるかの検討可能な状況がつけられつつある。

2. 研究の目的

国際バカロレア・ディプロマコース(IBDP)は高校の2年、3年レベルの教育カリキュラムを提示するもので、そこには教科にあたるものとは別にコアと呼ばれる3つの科目がある。そのうち、TOK(知の理論)とEE(課題論文)の在り方を分析し、日本に適用可能な学校図書館を用いた学習カリキュラムを明らかにすることを目的とする。TOKは、知識を獲得する方法について学ぶコースであり、複数の知識領域を題材にして、認識論、学問史、科学方法論、科学社会学などによる知の究明の方法を学ぶが、その際に、エッセイ執筆およびプレゼンテーションが義務付けられているので図書館が支援を行うことが多い。EEはテーマを自分で設定して研究を行いそれを小論文にまとめ、プレゼンテーションを行うものである。こちらは教員だけでなく図書館員が指導することも多い。この研究では、IBDPがなぜこのようなコア科目を導入するのかを明らかにするために、背景にある西洋思想史を明らかにし、実際にどのようなカリキュラムが生まれ、どのようなシラバスの展開があるのかを調査する。また、IBDPが学校図書館をどのように位置付けているのかを明らかにし、日本のIBDP校および一条校での運用の可能性について検討する。さらには、IB校に限らず一般の学校で導入されつつある探究学習に対して、IBDPのTOKやEEが示唆するものを考察する。

3. 研究の方法

文献調査、英語文献翻訳、IBDP関係者との協働作業、連携研究者による国内のIBDP校の調査、公開シンポジウムの開催など複合的な方法を組み合わせて行う。当初、IB本部(ジュネーブ)での聞き取りやヨーロッパのIBDP校の見学とインタビューを予定していたが、ちょうどコロナ禍と重なって海外調査ができなかったため国内で可能なことに切り替えた。

4. 研究成果

1)背景の思想研究 国際バカロレアは1968年にジュネーブで始まった。最初のディレクターであったオックスフォード大学の教育学者A. D. C. Petersonの著書Schools Across Frontiers, 2nd ed(2003)によれば、IBDPのカリキュラムは西洋の伝統的な人文主義(humanitas)の要素を色濃くしている。そこで、西洋の人文主義の系譜を整理しそれが日本の教育思想、図書館思想とどのような関係にあるのかについて『アーカイブの思想』にまとめた。また、人文主義と図書館の思想および技術がどのような関係にあるのかを明らかにするために「知識資源システムとは何か(図書館と知識資源の新たな動向)」「知のアーカイブ装置としての図書館を考える: ニュートン関係資料について」を執筆した。

2)学校図書館史研究 日本では戦後占領期に学校図書館は経験主義教育を支援することで注目されたが、まもなく教育課程自体が系統主義教育に切り替えられた。このため十分な人の手当も行われずに長く読書施設とされたことに対する理論的な批判をするために行っている。以前から行ってきた学校図書館史研究をまとめて『教育改革のための学校図書館』として東京大学出版会から刊行し、併せて関連する学会発表を行い論文として学会誌に投稿中である(「戦後学校図書館のマクロ分析」)。それ以外に、学校図書館史の論文「深川恒喜研究のための予備的考察」が査読を通過して掲載予定であり、さらに1本(「戦後新教育における初期図書館教育モデル」)を投稿中である。

3)IBDPカリキュラムと学校図書館の関係 国際バカロレアのカリキュラムがどのように学校図書館に関わるのかを明らかにするために、カリキュラム構造の分析ととくにTOKがどのように実施されているのかをIB公式文書を用いて明らかにし、学会発表した(「国際バカロレアと学校図書館との関係」「IBDPの「知の理論(TOK)」」「課題論文(EE)」が図書館情報学に示唆するもの」)。

4)アンソニー・ティルク『国際バカロレア教育と学校図書館』の刊行と公開シンポジウムの開催 国際的に学校図書館をIBDPに位置付けるための理論的実践的活動を行っているティルク氏の

著書の日本語版の翻訳の監訳を行い、2021年9月に学文社から刊行した。また、2021年11月23日にティルク氏の講演を含めて、IBDPと学校図書館をテーマにした公開シンポジウムをオンラインで開催し、150人以上の参加者を集めた。シンポジウム記録はネットで公開している (<https://sites.google.com/view/slil-inquiry/past>)。

5) 連携研究者によるワークショップ参加報告と国内IBDP校の図書館調査 IBアジア太平洋地域支部が開催するワークショップに連携研究者3名が参加し、その結果を報告した(HPで発表予定)。また、連携研究者が国際バカロレア認定校学校図書館の調査を行い、その結果の一部を学会で報告した(「日本における国際バカロレア認定校の図書館の実態」)。これは学会誌で発表予定である。

6) 今後の研究継続のための研究会発足 上記の翻訳と公開シンポジウムチームによってSLIL (School Library for Inquiry Learning) という研究会を立ち上げ、探究学習と学校図書館との関係を中心にして国際バカロレアも含めた研究を継続することにした (<https://sites.google.com/view/slil-inquiry/home>)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 根本彰	4. 巻 113巻12号
2. 論文標題 教育改革と学校図書館の関係について考える	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 図書館雑誌	6. 最初と最後の頁 792-795
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根本彰	4. 巻 No. 836
2. 論文標題 知識資源システムとは何か（図書館と知識資源の新たな動向）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 三角旗	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根本彰	4. 巻 vol. 68., no. 2
2. 論文標題 戦後学校図書館のマクロ分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本図書館情報学会誌	6. 最初と最後の頁 112-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根本彰	4. 巻 39号
2. 論文標題 深川恒喜研究のための予備的考察：付 深川恒喜著作目録暫定版	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 図書館文化史研究	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 根本彰	4. 巻 40・41号合併号
2. 論文標題 知のアーカイブ装置としての図書館を考える：ニュートン関係資料について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 短期大学図書館研究	6. 最初と最後の頁 103-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 根本彰
2. 発表標題 国際バカロレアと学校図書館との関係
3. 学会等名 日本図書館情報学会研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 根本彰
2. 発表標題 日・米・仏のカリキュラム改革史における学校図書館政策
3. 学会等名 日本図書館情報学会春季研究集会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 根本彰
2. 発表標題 教育と図書館の関係について考える
3. 学会等名 三田図書館・情報学会月例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高松美紀
2. 発表標題 日本における国際バカロレア認定校の図書館の実態
3. 学会等名 日本図書館情報学会春季研究集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根本彰
2. 発表標題 戦後学校図書館のマクロ分析
3. 学会等名 日本図書館情報学会研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 根本彰
2. 発表標題 IBDPの「知の理論（TOK）」「課題論文（EE）」が図書館情報学に示唆するもの
3. 学会等名 三田図書館・情報学会研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 根本彰、齋藤泰則編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 日本図書館協会	5. 総ページ数 349
3. 書名 レファレンスサービスの射程と展開	

1. 著者名 根本彰	4. 発行年 2021年
2. 出版社 みすず書房	5. 総ページ数 320
3. 書名 アーカイブの思想	

1. 著者名 根本彰	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 341
3. 書名 教育改革のための学校図書館	

1. 著者名 アンソニー・ティルク著（中田彩・松田ユリ子訳、根本彰監訳）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 143
3. 書名 国際バカロレア教育と学校図書館：探究学習を支援する	

〔産業財産権〕

〔その他〕

<p>オダメモリー https://oda-senin.blogspot.com</p>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------